

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特別受承認雜誌第六二七号  
平成二十二年九月一日発行(第四百十三卷第九号)

# ホトトギス

九月号



## 俳句随想 〔三百三十九〕

汀子

朝日俳壇の入選句に対して昨年秋の日本伝統俳句協会全国俳句大会賞の句と類似している旨投書があった。その作者本人からの申出である。私はその事実を真撃に受け止めて恐縮した。日本伝統俳句協会賞の句へ母の日や何もいらぬといふ母に〜に対して朝日俳壇稲畑汀子選の三席の句へ母の日や何もいらぬと言ひし母である。一字、下五の「……いふ母に」と「……言ひし母」の違いだけで、あとは同じ表現であり、類似といえれば類似に違いないと言える。俳句は短い詩である。特に、母の日という季節には類想的な句が山のようにある。母の日の母を描いて同じ句が出来ても不思議はない。必ずしも真似して出来るものではないが、同じ着想で出来てしまうことがあるのも確かである。

下五字の「……いふ母に」と「……言ひし母」の一字の違いは一句に大きな違いがあるのに気がついた。「……いふ母に」は「さて何をあげたらいいだろうか」という作者のため息が聞こえてくる句である。「……言ひし母」は、「慎ましい母を描いている一句」と言える。

俳句は一字が重い。一字で意味が変わる。そのことを考えたいと思う。虚子の句「二三子や時雨るる心親しめり 虚子」の句に対して「二三子や時雨るる心親しめりと 杞陽」という句を思い出した。

句日記 汀子

平成二十一年九月二日 ロイヤル俳壇

一叢の芒に流れゆく月日  
暮しぶりまでは変らず蚯蚓鳴く  
秋の夜の空を仰いでゐる時間  
秋の夜の星へきざはしかけられし  
先づ風の所在となりぬ芒叢

九月五日 芦屋ホトギス会

藤袴 咲かせて藤袴 文庫  
蜻蛉の空より高し星見台  
きざはしは星に向へる夜長かな  
星見台までは届かぬ虫時雨

九月六日 関西野分会

海越えて来られし人に蚯蚓鳴く  
灯下親しいつか一人になつてをり  
遠き旅近づいてゐし葛の花

九月六日 下萌句会

この辺り秋草植うる計ごと  
空仰ぐためのきざはし秋の風  
海越えて着けば夜長となる泊り  
記憶力テスト終へ来し夜長かな

九月八日 大阪倶楽部

星を見に夜長の稿の筆置きて  
藤袴 文庫と名づけ秋展示  
今は亡き一人の詩人茶立虫  
明け方の月の所在を問ふことも  
書き上げて夜長の時間余しけり

九月八日 綿業倶楽部

空仰ぐとき蜻蛉の空と逢ふ  
訪ふことのなき曾爾芒いかばかり  
快晴を伴ひて来し蜻蛉かな

九月十日 清交社

明日より始まる旅を爽やかに  
これよりの旅路の秋を楽しまむ  
飛鳥路となりし証や曼珠沙華  
端鳩のゐる筈のなきところかな  
爽やかな目覚めに今日のはじまる  
案内するため秋灯明うして  
星月夜なりしと真夜を覚めてをり

九月十一日 工業倶楽部

仲秋の星へきざはしいざなへる  
野分来る予報ばかりに終りけり  
仲秋の夜空に心遊ばせて  
ふり返ることも夜長の旅の宿  
青空を残してゆきし野分かな

九月十三日 日本伝統俳句協会全国俳句大会

爽やかに土佐の青空戻り来し  
新涼の風に道案内させる

九月十五日 有恒倶楽部

藤袴 文庫これより秋灯下  
冷やかや朝から雨となる気配  
土佐の旅終へて我が家の鉦叩  
くつるげばいつか身はず冷やかに  
旅疲れいうてをられず冷やかに  
秋灯を消せば近づく星の空

九月十五日 無名会

きざはしに露けき夜空展けたる  
白萩のほつぽつこぼれそめにけり  
露露しや海越えてゆく旅路とは  
ふと眠し風に萩揺れ萩の風

とどまらぬ露をこぼしてゐる間  
スペイン語グラチエ秋の灯の親し

九月十六日 夏潮句会

秋風をまとひはじめしジャカランダ  
午後からは少し曇りぬ黙日和  
初潮の渦越えて来し旅路かな  
六甲の風置いて来し芒かな  
この週に重なる取材秋の風

九月十八日 時雨句会

一つ空へ一つはじまる旅葉月  
雁へ供華先づ鶏頭をととのへり  
コスモスも加へたき供華束ねけり  
咲いてゐることが風呼ぶ秋桜

九月十九日 句会と講演の会

芋虫と分かりし指の止まりけり  
七草を活け込む手順あることを  
考へのつすきは夢で蚯蚓鳴く

九月二十四日 きつろぎ会

台風をあてにせしこと悔まるる  
忌日過ぎゆきたるばかり鉦叩  
台風を先を発ちゆく旅路鉦叩  
稜線を引く全景の露の富士

九月二十六日 北信越ホトギス俳句大会前日句会

沖よりの風は沖上げ秋の潮  
潮風に桜うすうす紅葉かな  
秋草と答へるも寺苑の一部分

九月二十七日 北信越ホトギス俳句大会

# 廣太郎句帳

廣太郎

平成二十一年九月一日 夢二忌全国俳句大会

昨夜星の仕上げてゆきし大花野  
探しもの見付けたやうな大花野

九月二日 一水会

秋出水この地にもあるダム論議  
すいません間違へました風の盆  
酔芙蓉今夜も赤き液体を

九月二日 カトリック新聞選者吟

カンナ燃ゆ二度とやつてはいけないと

九月三日 蕉心会

こんな日もたまにはあるさ厄日だもん  
風と来て風を放ちて赤蜻蛉  
爽やかに受けた電話がこれかいな  
朝顔や今何時やと思てんねん  
萩に風猫に鯉節てふ出会ひ  
三箇所も咬まれた秋の蚊とは憎し  
秋の蟬日を誘へる高さかな  
和三盆ヤクルト芒もて偲び

九月十日 土筆会

葛の花咲けば現れさうな君  
虫の声大都市の闇深めゆく  
鈴虫のひげが折つてをりにけり  
秋草に庭園裏の顔となる

九月十一日 六甲会

曼珠沙華父の消息知りたるか  
水澄める千代田区千代田一丁目  
澄む水に育ちゆくもの朽ちるもの  
水澄むや心の芥消ゆるより  
曼珠沙華白きは闇を塗り替へて

九月十一日 虚子記念文学館投句

稲筵車窓に館へ急ぎけり

九月十三日 日本伝統俳句協会全国俳句大会

秋潮を盛り上げ出づるものは何  
秋潮となる黒潮の色極め

九月十四日 朝日カルチャー若草句会

秋の暮てふ木星の舞台かな  
曼珠沙華連隊畦を攻略す  
秋の暮より明日へと繋ぐ旅  
曼珠沙華影を妖しく燃えたたせ

九月十五日 草木瓜会

秋の夜や惑星一つ遊ばせて  
地を恋へる釣舟草の角度かな  
秋の夜を酌めるワイン派日本酒派

秋の宵数多鳴くもの動くもの  
秋の宵忘れられたる傘一つ

九月十七日 登高会

冷やかに今日も山手線止る  
芒原忌日の色でありにけり  
月を見る時の横顔ふと淋し  
月めがけ上り過ぎたる凡フライ

九月十九日 ホトトギス社句会

忽と現れ忽と消えたる曼珠沙華  
何かしらきやあ芋虫よ箒箒  
七草の偲ぶ角度に活けられし

九月二十六、二十七日 北信越ホトトギス俳句大会

子規忌より越後へ繋ぐ旅心  
虚子も来よ謙信も来よ灯下親し  
身に入むや遺体無き墓苔むして

九月二十九日 若水句会百回記念山中湖吟行会

句心は霧の都心を抜けてより  
虚子踏みし足跡辿り山の秋  
尖りつつ霧纏ひつつ甲斐の嶺々  
穴まどひ迷ひし我等招くかに

九月三十日 目黒学園句会

彼女とは露けき仲でありにけり  
タイガースファンてふ露の世の私  
鳴きたくて人恋しくていとどかな  
江戸城を疲れさせたる秋刀魚かな

# 雑詠

## 廣太郎 選

春愁を眉根に見せて虚子坐像 神戸 千原 叡子  
 行春の俳磚伝ふ雨雫 同  
 ゆく春の五指に余る詠語り合ふ 同  
 席題は啓蟄ですよ弘子さん 東京 大久保白村  
 種芋の一誌を遺し逝かれけり 同  
 弘子恋ひ子鹿を偲び花吉野 同  
 愛蔵の渡仏日口記や椿寿の忌 福山 竹下 陶子  
 一天に霾り人に生死あり 同  
 太陽へ詩を発信葱坊主 同  
 ゆつくりと箸つかひをり花の雲 熊本 岩岡 中正  
 一片の落花に故郷あるごとく 同  
 妻さびしがらせてならぬ夕桜 同  
 若草の香をやはらかに踏みゆきぬ 龍ヶ崎 今橋眞理子  
 霞みたる下界のことは忘れさう 同  
 ゆるやかに春潮空へひいてゆく 同  
 雲に入り雲抜き月の旅路あり 金沢 藤浦 昭代  
 城の空鳥も月の景として 同  
 踏み迷ふ月の雫を含む芝 同

川下る荷船に匂ふ春の土 東京 橋本くに彦  
 サウンドをノイズにさせて猫の恋 同  
 競漕のオールの跡を追ふオールの 同  
 子猫もう闘争心の目を持てり 八尾 山下美典  
 堰眩し風の葉桜なほ眩し 同  
 青葉映ゆ馬上聖徳太子像 同  
 鴨の子の水の景へと乗つかりぬ 香川 湯川 雅  
 草隴後姿の消えやすし 同  
 一水に落花の遠き別れかな 同  
 両手より大地へ下ろし茄子植うる 神戸 立村霜衣  
 品隴の声低くして鶏合 同  
 ひるがへるたび吹流しのびてゆく 同  
 佐比売野の温泉に集ひ虚子祀る 大田 波多野弘秋  
 佐比売野の風雨に野焼果されず 同  
 佐比売野の埋没林に水草生ふ 同  
 襟正せとの花冷の虚子忌かな 京都 安原 葉  
 山里や忘れ雪にも積り癖 同  
 独活和といへば吉野の宿思ふ 同  
 花屑を池の樹影が又咲かす 樞原 稲岡 長  
 風そつと枝間くぐらせ落花避く 同  
 真昼時中千本の花の黙 同  
 一木の風からめとり藤懸かる 奈良 古賀しぐれ  
 神の地を掃き砂ずりの藤といふ 同  
 藤棚の下にはじまる古都暮色 同

## 雑詠句評（八月号より）

仁義・暮潮・昭代

比奈夫・一步・くに彦

佳乃・雅・純也

しげ人・廣太郎

### み吉野の花にも悼みかさねけり 京都 安原 葉

作者は、花で有名なみ吉野に入っていた。そして見ゆる限りの花が、絢爛と咲き誇る姿に見惚れていた。しかしその光景のどこかに、はらはらと散る花の姿も目にとまったのである。このとき作者の胸に浮んできたのは、散る花に対する次のような感慨であった。これほどの花でも、はかなく虚しくすべて散りゆく運命にあるのだということである。たまたま非常に親しい人が亡くなっていたので、散る花の姿に人生の移ろいを重ね、故人に対する悼みを重ねていたのである。（仁義）

毎年行なわれている稲畑汀子主催の「吉野くつろぎの旅」平成二十二年は、この会が行なわれる直前にメンバーの方が二人も相

次いで亡くなられてしまった。その方々を偲んでおられる事は容易に想像出来るが、それだけではなく、過去に亡くなられた方への哀悼の心も伝わってくる。（廣太郎）

### 春風に押されて前へ一歩づつ 神戸 山田 佳乃

句意まことに明瞭、表現もまた明晰。しかも俳句の骨法を心得ている。「春風」という季題も動かない。それは「春風」をたとえば「秋風」に置き代えてみればよく分かる。少し強いが、のどかな春風であろう。惜しまれて亡くなった母上弘子さんの跡を継ぐのに十分な資質を備えていることが、この一句からもよく分かる。いっそう研鑑を積まれて、「円虹」のますますの発展を計られることを祈ってやまない。（暮潮）

急逝された御母堂様の後を継がれて「円虹」の主宰になられた事は今更申し上げるまでもないのだが、筆者の知る限り、その決断の速さと実行力には、何か神懸りのものを感じた。虚子の例の句も思い出されるが、正に作者ならではの「春風」の名句が生れた。心よりエールを贈りたい。（廣太郎）（以下略）

天地有情

花子選

母の日の花に囲まれぬて淋し 東京 今井千鶴子  
 夏立つや夫亡き夫の誕生日 同  
 活けてこそしみじみとある山法師 豊中 瀧 青佳  
 人生は神の遊びや風涼し 同  
 のどけしや象の小川に寄りし旅 京都 安原 葉  
 内 仏 の 春 塵 払 ひ 奉 る 同  
 何も彼も初心に帰り落第す 東京 稲畑廣太郎  
 落第や世間を少し遠くして 同  
 初夏の森けふ濡れ色に夜明けたる 渋川 木暮陶句郎  
 受け継げるものの重さや青嵐 同  
 新樹晴近江の空は湖の青 奈良 古賀しづれ  
 一塔を落つ惜春の雨霽 同  
 鬱然と葉桜男盛りかな 神戸 三村純也  
 武具飾る養子養子と家を継ぎ 同  
 鴨引いて魂抜けの水広々と 箕面 井上浩一郎  
 花の満ち来り山門沈みゆく 同  
 水音に芝青々とそよぐ程 樞原 稲岡 長  
 麦秋の雨の匂ひの籠りけり 同

この花のために一会の花衣 神戸 後藤比奈夫  
 一串でよかりし花見団子かな 同  
 裏庭の筍といふ夕御飯 たつの 浅井青陽子  
 老鶯のしきりに鳴いてゐる目覚め 同  
 明るさへ差してたたむも春時雨 吹田 宮崎 正  
 久久にひかり戻りし湖うらら 同  
 大淀の時空流れて夏近し 神戸 長山あや  
 卯月野を光りて海へ五十鈴川 同  
 影ひとつ怒濤の島の田を植うる 福岡 松永唯道  
 寄せやまぬ島の怒濤に木の芽吹く 同  
 北二条西一丁目ライラック 東京 内藤呈念  
 リラ咲くと聞けばそぞろに旅心 同  
 まだ不安新車運転花並木 熱海 嶋田摩耶子  
 四月馬鹿ならぬ訃報や月朧 同  
 虚子よりも吾は長く生き忌を修す 同 嶋田 一步  
 アインシュタインと同時代なる高虚子忌 同  
 春の昼たつた五人のクラス会 小倉井 武井良平  
 うららかな富士見飽かざる一日かな 同

# 天地有情句評

汀子

何も彼も初心に帰り落第す 東京 稲畑廣太郎

落第という人生の断面を出発点とする初心。

受け継げるものの重さや青嵐 澁川 木暮陶句郎

吹き渡る緑の嵐の如く受け止める勇氣。

新樹晴 近江の空は湖の青 奈良 古賀しぐれ

雄大な琵琶湖の空に心を委ねたくなる新樹晴。

鬱然と葉桜男盛りかな 神戸 三村純也

葉桜となり鬱蒼と茂っている様を男盛りと見た作者の自画像。

花の満ち来り山門沈みゆく 箕面 井上浩一郎

桜に埋もれて行く山門の存在。(以下略)

立夏を迎えると夫の誕生日という記憶も悲しい。

活けてこそしみじみとある山法師 豊中 瀧 青佳

遠くから見ていた山法師の花を活けてもらって身近に見る親し

さ。

のどけしや象の小川に寄りし旅 京都 安原 葉

万葉集にある象の小川の現実にはトトギスを運んだ感激。